

## 欧州連合の模索は続く・・・

国際金融情報センターブラッセル事務所駐在員 橋本 択摩

### 欧州でみられる議論の錯綜

欧州に駐在して2年半が過ぎた。この間、08年の世界金融危機、そしてギリシャに端を発する欧州債務危機を、欧州の中心地であるブリュッセルにて目の当たりにするという機会を得た。また、南欧を含む欧州各国を訪問し、現地エコノミストにヒアリングする機会も多く得られた。その度に驚かされるのが、同じ欧州といっても各地域、所属によって見解が大きく異なる点である。まず、欧州統合に懐疑的な英国発の議論、報道は、大陸欧州のそれとは総じて異なる（もちろん全てではないが）。そして、遠い日本に届く情報は総じて英国経由のユーロ悲観論が多い。

また、同じ大陸でも見解の相違は甚だしい。例えば、財政規律の重視を欧州各国へ求めるため、9月下旬、欧州委員会は、政府債務の削減への取り組みが不十分な国に対し、財政統計によって「準自動的」に制裁金を課す案を提出した。10月に面会した欧州委員会幹部は、この提案の意義、重要性について熱く語る一方、同時期に訪問したパリでは、この提案を「クレイジー」、「イリュージョン」などと表現し、批判していた。この提案については、フランスの強い反対にドイツが譲歩したことで、10月末の欧州理事会で「準自動的」な制裁金の導入は見送られたことは周知の通りである。

各国間でも、例えば財政規律に対して厳しいスタンスをとり続けるドイツと、南欧諸国を時に擁護する姿勢を見せるフランスとではまた見解が異なる。このような議論の錯綜を目の当たりにするにつけ、欧州連合（EU）は単なる国家の集合体に過ぎないことを痛感させられる。

### 独仏枢軸を中心とする政策決定プロセス

しかし、これまでもこうした見解の相違を乗

り越えてEUが発足し、ユーロ導入に至った。この歩みは長年の政治的模索を繰り返したものであり、今回の危機も長い目でみればその一つのきっかけとなったに過ぎない。各当事者と話をすると彼らには共通点もあり、それは欧州のこれまでの歩みに対する自負を抱いていることである。それを前にすると、米英日のような傍観者が軽々しくユーロ解体を論じるべきではない、とさえ思ってしまう。

とはいえ、百家争鳴の議論をまとめて前進するのは至難の業である。今回の欧州理事会でみられたように、欧州の政策決定プロセスは、欧州委員会が打ち出した提案を、二大国の独仏枢軸が練り直したのち半ば強引に押し進めることが通例となっている。イタリアなど、結果的に追従を余儀なくされる国家にはもちろん不満はあるが、欧州ではこのプロセスが経験則上、唯一といってもよい方法となっている。今後もEUは、欧州委員会と加盟27ヶ国の民主的な議論に、独仏の「腕力」が適宜繰り広げられることで、試練に立ち向かうことになるだろう。

### 国民レベルで広がる内向き志向

ブリュッセル駐在であるだけに、これまでやや楽観的に書いたが、欧州の未来に立ちほだかる課題もやはり大きい。最近、最も気になることは国民レベルで広がる内向き志向である。ギリシャ救済、ユーロを巡るドイツ国民の反発もその一例である。また、景気低迷、緊縮財政、高い若年失業率と、内向き志向につながる要素は欧州に多く存在しており、その結果、移民排斥を掲げるポピュリスト政党の躍進が欧州各地でみられている。現場にいて、政策当事者と国民レベルでの「欧州統合への思い」の乖離が顕著となりつつあるのを強く感じる。 (終)